

日本吉を紡ぐ

その国の技術と材料を借りて センスを織り込む



タイ北部チェンマイにHIVに母子感染した孤児たちの生活施設がある。「ガジュマロの木の下で」という意味を持つ「バーンロムサイ」だ。これを運営する名取美和さんは数年前に、施設の運営費を捻出するために現地の素材を使ってものづくりを始めた。天然素材を使った衣料や雑貨は、やがて日本でも販売されるようになり、いま多くのファンを得ている。日本生まれの名取さんがタイでつくったアイテムには、どんな思いが込められているのだろうか。そして名取さんの目に映る「日本の美意識」とは――。

バーンロムサイ代表

◎ デザイナー、プロデューサー ◎

名取美和さん

な と り み わ

1946年、東京都生まれ。16歳でドイツに渡り、商業デザインを学んだのち、日本で雑誌編集や広告制作に携わる。1966年にヨーロッパへ渡り、日本とヨーロッパを拠点にデザインや撮影コーディネート、通訳などの分野で活動。その後、東京で西洋骨董品店を営んだ後、1997年にタイへ移住。1999年、両親をエイズで亡くし、自分たちもHIVに母子感染した孤児たちの生活施設「BAN ROM SAI (バーンロムサイ)」開設。その後、オリジナルプロダクツの生産・販売を開始。2001年より年1回、施設の子供たちの作品を展示する「UNDER THE TREE展」を東京で開催。ゲストハウスの運営も手がけている。



<http://www.banromsai.jp/>



2006年12月、東京・六本木「AXIS GALLERY ANNEX」で開催された第6回「UNDER THE TREE展」の会場にて。

子どもが宿す クリエイティビティ

タイ・チェンマイにある孤児施設「バーンロムサイ」。その代表を務める名取美和さんは、日本に帰国するたびに日本の良さと悪さ、その両方を感知するという。

「日本の風土は美しいし、人間ももともと優しい国民だと思います。でも、日本に数日いると不愉快なこともたくさん出てきます」

名取さんは、現在の日本の子どもたちが置かれている現状を見聞きするたびに心を痛め、同時に「バーンロムサイ」の子どもたちの顔を思い浮かべる。

「ふだんタイの子どもたちの表情を見ながら暮らしているので、日本で子どもたちの表情を見ると、目の輝きが違うことがわかります。バーンロムサイの子どもたちは肉体的なハンディや親がないという事情はあるものの、とても生き生きとしています」

名取さんは「バーンロムサイ」の経営を続けながら、オリジナルプロダクツ

の製造・販売も手がけている。そして子どもたちも、ものづくりの楽しさを知っているという。

「子どもたちが仕事を手伝ってくれます。そのときものづくりのおもしろさを自然に覚えるようです。絵を描くときに大きな机の上に筆を立てておいて、大きな紙を与えると、熱中する子は紙の中に入ってしまうくらいです。上手とか下手とか基準はないので『この色はきれいなね』『この絵、好きよ』とか何か感じたことを伝えます。ほめていると、その子は絵が好きになります」

すべての子どもはクリエイティブな能力を宿している、というのが名取さんの基本的な考え方だ。

「30人いれば全員がクリエイティビティを持っています。絵もうまいけど、竹で割いて上手に弓矢をつくる子がいます。見ているだけでおいしそう、きれいなおままごをする子もいます。そういった中からさらにクリエイティブな能力が生まれてくるのです。子どもは美しいものが好きだし、ものに何か機能を持たせることにも気づき、想像しながらものをつくります。

私は子どもたちのそういう才能を伸ばしていきたいんです。そのうち『私は勉強が好き』という子も出てきます。それはそれでいいんです。自分は何が好きなのかということに気づいたわけですから。だから親はその意欲をつぶさないように見守らなくてははいけません」

そう語る名取さんも、子どもの頃から絵を描くことが大好きだった。その後、クリエイティブな分野で才能を発揮することができたのは、「両親が好きなことをさせてくれたから」と振り返る。

問題解決のために 必要な発想の転換

オリジナル商品をつくらうとしたきっかけはこうだ。

「寄付だけに頼る運営をしていると、寄付をいただけなくなったとき、施設の運営がストップしてしまいます。そういう不安を持ち続けながら運営するよりも、『稼げるお金は自分たちで稼ごう!』と考えたのが出発点です」

問題解決のために必要な発想の転換がそこにあった。

さらに「アジア」を俯瞰して眺め、名取さんはプロダクトデザインに言及する。

「アジアの人が外国を意識して商品をつくると、妙なお土産品のようなものになります。材料は揃っている。技術もある。それなのに『どうしてこんなものをつくってしまうの?』といった商品ができあがります」



目指したのは、クオリティの追求だった。

「アジアの商品は、縫い方にしてもどこか垢抜けないですね。私は『恵まれない子どもたちがつくった商品です』と訴えるのではなく、お客様が商品を手に取り、身につけて『ああ心地よいわ』と好感を持ってもらい、最後に『ああ、こういう施設でつくっているのか?』と行き着き、施設の活動も理解してもらえるような流れがベストだと考えています。だから商品として、まず良質のものでなければいけないんです」

素材を重視し、実際の生活からかけ離れないふだん使いのものをトータルでデザインを描く。それが名取さんのものづくりの姿勢だ。

「私は糸があれば生成のまままで織ろうと思う。カスリや作務衣をつくっても仕方がない。それよりも、パジャマにしよう、ベッドカバーにしよう、と考えます。『こんなものがあればいいな』と想像し、トータルでデザインを描きます。雑貨ものは自分でデザインしていますが、私は洋服のデザイナーではないので、洋服に関してはイメージをパタンナーやデザイナーに伝えて商品化しています」

すべての商品に名取さんのセンスが織り込まれる。

「その国にある技術と材料を借りて、それをセンスアップし、ナチュラルというテイストの中に入れて商品化しているわけです。私はいわばプロデューサーのような立場。いろんな意見を言うてくださる方がいますが、それに振り回されるとダメ。最終的に自分がいいと思ったものを独断と偏見で決めていく。最終的には『自分で選ばせて』と言います」

商品の生産・販売、 購入を通じた社会貢献

名取さんは、施設で製造・販売する商品には、とりわけ洗練が必要であると説く。

「フェアトレード商品は暗くてダサイ、というイメージがあります。優れたデザイナーが福祉施設や社会貢献している施設の仕事を手伝ってくれない背景には、『そんなかっこ悪いことはしたくない』という思いがあるからでしょう。そういった印象を持たれる施設は、基本的に演歌調です。

私はそうではなく、もっとスマートにやりたい、と考えています。中途半端なものをつくっても誰も興味を持ってくれません。そういうところできちんとしたものをつくってほしいという思いがあります」

試行錯誤を重ね、日本のいくつかのセレクトショップが「バーンロムサイ」の商品を扱うようになった。

「日本でバーンロムサイの商品を扱ってくれる店は、商品を好んでくださったうえに、施設のことも理解して下さる。だからよい関係が築けるのです」

さらに「社会貢献」というキーワードを用いて、ひとつの支援のあり方を説明する。

「私たちが社会貢献したかったけれども、フェアトレードの商品は扱いたくはなかった。私たちはとにかく明るくいたいと考えていますし、事実、子どもたちもとても明るい。そして日本にはバーンロムサイのファンも社会貢献したいと思っている人もいっぱいいます。視点を変えるなら、ひとつの寄付のあり方として気に入ったものを買う、それが支援となるということです」

「カレン族腰織り多様布」は、タイ北部からミャンマーにかけての先住民であるカレン族伝統の腰織りでつくったマルチな布。素材はコットン。カラーは、天然藍染め、黒檀染め、ナチュラルカラーの3色。サイズは85cm×125cm、4,500円(税込み)。





第6回「UNDER THE TREE展」の模様。今回掲げられたメッセージコピーは「THINK ONCE AGAIN!」。バーンロムサイの7年間を振り返り、その原点を一緒に「もう一度考え直す」「日本の皆さんにもHIV/AIDSのことをもっと知ってもらいたい」「命や家族について見つめ直す機会にしたい」という思いが込められている。

自身に宿る 「日本人らしさ」

名取さんが「ものづくり」に携わるなかで、自身の「日本人らしさ」を自覚するのはどんなときだろうか。

「ものづくりでは、自分が日本人であるということはあまり意識しませんが、細かいことでもいい加減にできずに、隅々にまでこだわることは日本人らしいかもしれません」

では、日本人の美意識はどのように映っているのだろうか。

「日本人の美意識は、近年薄れてきましたが、謙虚さ、良い意味での自己



「バーンロムサイ」(タイ北部チェンマイ)に隣接する元果樹園の広い敷地に開設したゲストハウスは、「将来子どもたちが自分たちで運営できれば」との思いで建てられた。コテージタイプの部屋が2棟。別棟には広々としたオープンエアのリビングとダイニングがある。

制御でしょうか。もともと分相応に暮らしていた限り優しい国民であったのですが、ある時期からはじまった上昇志向により、日本人としての美点が薄れてきたと感じられます。日本人のメンタリティーとして『私も日本人だ』と思うのは、良い意味でも悪い意味でも生真面目さでしょうか」

3月には初の直営店「バーンロムサイ鎌倉店」が開店した。

「日本で卸していくには、いろんな障害もありましたが、やっと直営店を開くところまでたどりつきました。鎌倉店のオープンは、デザイナーをふりだしに、孤児院やゲストハウスの運営などをしながら生きてきた私のトータルなかたちかもしれません。でも、いろんなことを見て体験した今だからできることでしょ」

Text by : 綾瀬良太



「タイパンツ」は、一度着たら忘れられない着心地の良さを誇る究極のリラックスパンツ。着る人の体型を選ばず、人それぞれに着こなしが創造できる奥の深いアイテム。素材は綿。サイズM:身長155cm~170cm、L:165cm~。カラーは黒、茶、紺の3色。3,675円(税込み)。



「ギャルソンエプロン」(ロング)は、定番人気アイテムのひとつ。普段はなかなかできない生パスタ作りやそば打ち、お菓子作り、さらには陶芸、ペインティング、ガーデニングなど趣味の時間にも大活躍。素材は麻。サイズはフリー、カラーは黒とナチュラル。着丈80cm、幅89cm。4,000円(税込み)。



こちらは左の「ギャルソンエプロン」のショートタイプ。ロングよりアクティブな印象を与えてくれます。ロング同様、ポケットがついています。カラーは、黒とナチュラルの2色。素材は麻60%、綿40%。サイズは着丈40×幅90cm。3,500円(税込み)。



「サイコロバッグ」は、タイの山岳民族のバッグからヒントを得てつくったサイコロ型のショルダーバッグ。サイズはW35cm×H24cm、底面24cm角。ショルダー部分104cm。カラーは白(麻)、藍染め(綿×麻)、藍染め(綿×麻×オーガニックコットン)の3種。4,725円(税込み)。